

多角的な視点で考え、小さな『気づき』に学んでいく

～伝統工芸品から見えてくるもの～

谷口 佳都司

現代社会では、文化の多様性・国際化に伴って情報量が増大している。また、機械の進歩で製品が大量生産されたり、次から次へと新しい製品が開発されたりしている。そのため、大人も子どもも常に「目新しいこと」や「目新しい物」との出会いを期待するようになってきている。また、日常生活がいろいろな面で複雑化し、以前に比べ多忙になり、気持ちにゆとりがなくなっている。同じことでゆっくり立ち止まったり考えたりする機会が減少してきているのだ。人が、自分以外の「人」のことや自分を取り巻く「地域社会」について、細かい内面的なところに目を向けることが出来なくなっているのではないだろうか。子どもたちの学校生活も同様である。仲間の成長や素晴らしい発言に気づかない。凄く目立った出来事でないと気づかないし気にも留めない。そんなことになっているのではないだろうか。社会科の学習を通じて「人」「地域社会」へ深く関わる力をつけ、表面的だけでなく内面的なところにもっと気づく子どもに育てていきたい。

(キーワード) : 気づき, 生き方やこだわり, 内面的, 学習展開

1. 小さな『気づき』に学ぶとは

話し合いの中で、子どもたち一人ひとりが発見したことや考えを発言すれば、多くの仲間の『気づき』を互いに共有できる。そこから、また自分の新たな『気づき』が生まれてくる。児童が考えることは多種多様である。その一人ひとりの小さな『気づき』の積み重ねにより、話し合いが進展し、様々な学習課題の解決に迫っていくことができる。

発見したことや分かったことを発言するだけが『気づき』と言うのではなく、新たな疑問や分からないことの発言も大切な『気づき』とし、話し合いをより深化させ、活性化させるものとなる。

自分の発見・考え・疑問を仲間に伝える子が増えると、仲間の様々な意見を聞くことができ、互いに知識や考えが深まり高まる。多くの仲間の『気づき』に学び、自分の新たな『気づき』が生まれ、それが繰り返されていく。たくさんの意見が全体学習の場に反映されることで、あらゆる社会的事象の知らなかった点や分からなかった点をみんなで考え学んでいくのである。

2. 『気づき』を生むために

2.1 分かった喜びを実感できる教材開発・単元構成

社会科の授業では、新しい知識を大量に教えこもうとする傾向がある。教科書にある内容をまとめるだけの説明型の授業になったり、教師の質問に対して断片的に子どもが知識を答える授業になったりする場合が多くなっていく。暗記を多く取り入れた授業になると、膨大な知識の量に子どもは押しつぶされ、社会科嫌いになってしまう。

必要な知識は軽視してはいけないが、たくさんの知識の中から、新たな知識の獲得や発見につながっていく

く知識を教師がしっかり精選することを心がけるようにしたい。

社会科の学習が楽しいと感じるのは、社会的事象について今まで分からなかったことを解決したとき、あるいは、自分の考えや調べてきたことを仲間に聞いてもらったときと思われる。だから、そのような解決や活動ができる教材開発・単元構成をしていくことが教師の大切な役目なのである。

2.2 多角的な視点で考える

本年度の研究では、教科書を教える発想から脱却し、調査活動・話し合い活動・体験活動を柱にして、多角的な視点を持って考える学習形態を目指してきた。

1学期に取り組んだ「水の行くえ」の単元では、浄水場の見学に加え、水道管の通る橋・ポンプ場・配水池・川の調べ学習等、様々な角度から上水道について探究してきた。2学期の「伝統工芸・伝統工業」の単元でも、漆器に携わっている多くの人々と出会うようにした。また、塗り師職人の谷岡さんを通じて漆器作りの深いところを探っていった。色んな種類の漆器を見たり、体験や見学を取り入れたりした。まだまだ不足していたと感じているが、複数の資料を扱わせることで多角的な視点で考える力が育まれ、様々な学習活動に触れさせることで学ぶ技能をさらに高めたのである。

2.3 社会的事象の内面的なところを見る

社会的事象の細かい内面的なところを探っていくことは社会科の学習の難しいところであるが、そこに本当の楽しい学びがある。表面的に分かっても、新たに知識が増えるだけにとどまる。しかし、その事象について深く考えていくことで、新たな発見と発見した達成感や自信を得られるのである。

例えば、「地いきのはってんにつくした人」の単元で、広村の堤防を造った浜口梧陵の学習について考え

てみる。浜口梧陵が、醤油製造会社の主人であること、堤防の工事にかかる費用を全部出したこととしたこと、稲むらに火をつけて大勢の命を救ったことは凄いことであり子どもたちにとって興味のある出来事であろう。それを分かることはもちろん大切である。しかし、そこで終わると知識の学習だけになる。その知識を関連付けて、浜口梧陵という人物の生き様や広村を大切に思う気持ち、工事をしていく努力や苦勞、広村の人々の生活や願い等を想像し考えることで子どもたちの「自ら考える力」になるのである。

以上のような学習展開にしていけば、本当にその仕事や出来事に携わっていなくても、「人」や「地域社会」の細かい部分や深い部分に到達できるのである。

3. 授業の実際

3. 1 単元

第4学年 伝統工芸・伝統工業

「和歌山の歴史が育んだ職人の技 ～紀州漆器～」

3. 2 単元目標

地域独自の製法や技術によって伝統工芸品が作られていることを知ると共に、郷土の伝統工芸に愛着や誇りを持ち、守り続けることの大切さを理解する。

○伝統工芸に関心を持ち、意欲的に調べ、考え追究する。

○伝統工芸の現代における課題・良さ・特徴等に目を向け、伝統工芸をこれからも守り続けるためにどんなことを大切にすればよいかを考える。

○調べたこと、分かったこと、自分の考え等を書き表したり発言したりするなど、分かりやすく表現する。

○和歌山県には数々の伝統工芸が昔から続いており、今もなお職人から職人へと技術を引き継いでいることが分かる。

3. 3 単元計画

(全22時間 社会12時間+総合的な学習10時間)

第1次 伝統工芸品って何? (4時間)

第2次 海南市黒江へ行こう。 (6時間)

第3次 紀州漆器の伝統を守り続けていくために。 (7時間)

第4次 和歌山県の伝統工芸・工業マップを作ろう。 (5時間)

3. 4 伝統工芸の素晴らしさを学ぶ

海南市黒江が産地である紀州漆器を中心に持ち上げ、和歌山県の伝統工芸や伝統工業について学習した。特に「伝統工芸品を作る職人さん」や「伝統工芸品の素晴らしさ」等に焦点を当てて進めていくことにした。

紀州漆器は、昭和53年に国の伝統工芸品として指定を受け、福島県の会津塗・石川県の山中塗や輪島塗と共に「漆器の日本四大産地」に数えられている。歴史的に非常に古く、起源は今から400年前にもさかのぼると言われている。最近では、高価な漆器よりも安価で大量生産できるプラスチックの製品や人工漆塗

料の製品が主流になってきている。日本人の生活様式がヨーロッパやアメリカのような機能性を重視する方向に変わってきたこともあって、手入れが簡単で実用的な製品が多く使われてきている。

しかし、新しく開発された製品が、古くからの技法で作られた製品よりもすべての点で勝っているということではない。紀州漆器のような伝統工芸品には、職人さんの長年にわたり培ってきた技術があること・郷土の伝統工芸の奥深さがあることにも目を向けてほしい。

木の材料や生漆を扱い、昔から受け継がれてきている全て手作業の技術を持った職人さんは減少している。しかし、伝統工芸品には、その製品にしかない様々な特徴がある。それは、その地域の職人さんしか作れないこの世に一つしかない物であり、その地域独自の製法や技術でしか出せない色・形・絵・模様等を持っているのである。

新しく開発される製品に優れた点があるように、古くから受け継がれてきた伝統工芸品には他の物にはない優れた点がある。子どもたちが、和歌山県で育まれてきた紀州漆器の素晴らしさを理解し、愛着や誇りを持ち、今後も守り続けていく必要性を感じさせることを期待した。

3. 5 職人さんの心に触れる

この単元では、漆器を実際に見たり触ったりして分かることと、目には見えないが漆器から伝わってくるものの両面を追究させた。プラスチック製のお盆で蒔絵体験、伝統工芸士である「塗り師」谷岡さんの実際の作業(図1)の見学をすることで、どのようにして紀州漆器が作られているのかを理解すると共に、漆器の生産には必ず人の手が携わっていること、良い製品を目指して職人さんが丹精込めて作り上げていること、黒江地区の特色や伝統を継承していくこと等、人々の様々な工夫や努力があることに気づかせようとした。

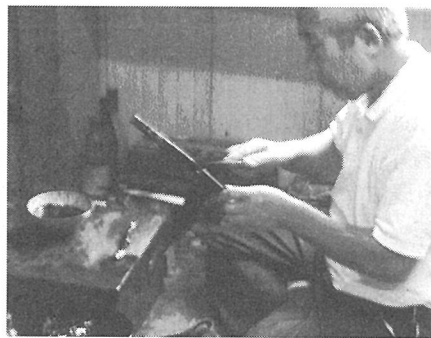


図1. 谷岡さんが作業をしている様子

特に谷岡さんからは、仕事をきちんとしていくことの大変さや真剣にこだわりを持ち続けて作り上げる心の強さが伝わってきたはずだ。この学習を通して、子どもたちが色々な人々の生き方・こだわりに気づき、人の心の動きを感じ取ることを願った。

3. 6 「どうやって守っていくのか」を考える

あらゆる角度から見つけた紀州漆器の特徴や素晴らしさを発表し合い、今後紀州漆器をどうやって守っていけばいいのかを考え話し合わせた。漆器産業の現状は、安価で実用的な製品の方が中心となってきている。だからこそ、安価な製品も高価な製品も併せて考え、紀州漆器の伝統工芸をこれからも続けていくためにはどんなことをアピールし守っていかなければならないのかを考えさせた。家から持ち寄った漆器、うるわし館の見学や蒔絵体験(図2)、紀州漆器伝統産業会館事務局長の布引さんの話、職人さんの作業の見学、漆器店(問屋さん)の人の話、調べ学習等からヒントを見つけ、自分なりの発見や考えを発言していた。海南市にとって、紀州漆器が大きな特徴の一つであり、非常に意味のある重要なものであることを理解させることをねらった。



図2. うるわし館の展示室の見学

4. 授業の考察

4.1 職人さんの姿が見える漆器

谷岡漆芸店に行って、実際に木地に漆を塗る作業を見学したことは、学習意欲を高めたことになった。

見学するまでに、子どもたちが家から持ってきた漆器をいくつも見てきた。模様や色、漆独特の光沢等を見て、漆器の良さに気づいていた。しかし、職人さんが手際良くハケで塗るところ・漆器作り専用の道具・仕事場等を見ると、別の凄い感動があった。

もう既に完成された漆器と、制作途中の漆器とでは見えてくるものが明らかに違うのである。その場で聞きたいことが次々と子どもたちの頭の中に浮かんだようだった。ここでしか聞けない質問がたくさん出てきて、谷岡さんに答えてもらう時間が足りないくらいであった。見学だから当然と言えばそうであるが、素晴らしい技術を持った職人の谷岡さん、その職人さんが作った漆器という感覚になったのは確かであった。

4.2 漆器の特徴・素晴らしさを考える

紀州漆器の良さを見つけていく話し合いを行った。そこで、「目に見えること」と「目には見えないけれど見えてくること」の両面から自分の考えや発見を出し

合った。仲間が言った意見を聞いて、「これも漆器の良さかな。」「この意見を今言ってもいいかな。」「付け足して言ってみよう。」というような反応で、自分の考えを発言してみようとする場面があった。

「目に見えること」(図3)には、色・模様・つや等が意見として出てきた。また、「目には見えないけれど見えてくること」(図4)には、職人さんの苦労・工夫・姿、もとの材料、技術、製作にかかった時間等が出てきた。漆器の外見だけでなく、漆器を見つめ思い浮かぶことを追求させることにより、漆器本来の持つ素晴らしさや昔から受け継がれてきた伝統工芸の技術、手作りの良さ等が子どもたちにも見えてきた。

絵の色づかい。季節の花や木。つや。美しさ。
細かいところをきれいに塗っている。赤や黒の色。
形がすごく整っている。模様が描かれている。等

図3 目に見えること(子どもの意見)

谷岡さん達、職人さん。丁寧に塗っていること。
大事に使ってほしい気持ち。心がこもっている。
一つ一つの絵に心を込めて真剣に作っている。
職人さんが作った時間が見えてくる。すごい技術。
色々な苦労。作るときの緊張。職人さんはすごい。
美しさを見てほしい。等

図4 目には見えないけれど見えてくること(子どもの意見)

5. 成果と課題

5.1 今回の学習を振り返って

本実践においては、出来るだけ多くの人・物との出会いを重視してきた。その出会いから色々なことに気づき、その考えを書き表し、全体の場でも多くの子どもが発言することができた。この学習では、塗り師の谷岡さんと奥さん、うるわし館の方々、蒔絵体験で御指導して頂いた4名の先生、漆器店の方等、漆器に関わる仕事をしている数名の方々にたくさんの方を教えて頂いた。紀州漆器の歴史・作業工程・工夫や努力・職人さんの持つ技術・道具等。このような機会でないとなかなか分からないことを学習できて良かったと感じている。

学習を進めていく中で、いくら話し合っても調べてもとうとう解明しないまま終えてしまったことがいくつもあった。今振り返れば、教えてもらった方々に子どもたちが電話等でもっと質問すれば良かったと後悔している。次回からは、折角の出会いをもっと積極的に有効に利用する努力をしていきたい。

研究発表会の授業では、漆器産業について困っていることから紀州漆器の良さをいろんな視点から見つけ、今後守っていくための手立てを考える学習をした。この授業を参観した先生から協議会で指摘して頂いたことがあった。それは、この授業の中で、課題を間違いなく解決に導くキーワードを子どもが発言していたの

に、私は採り上げずそのまま流してしまっただけであった。「漆器を作るロボットを作ればいい。」その言葉を私は採り上げることが出来なかった。この発言が、話し合いの流れを混乱させてしまうと判断したのが理由であった。もし勇気をもって、そのキーワードを利用すれば、話し合いがより活性化され、この課題の解決にたどり着いていたはずである。残念なことに、「手作りの漆器」の素晴らしさを知る大きなチャンスを逃してしまったのである。この授業で、多くの子どもたちが考えを出したのは良かった。しかし、結局、曖昧な解決の状態での授業を終えたのは良くなかった。今後は、子どもの大切な気づきを見逃さず採り上げ、それをつなぎ、話し合わせる中でもっと内容を発展させたい。そして、このような授業展開にするためにも、教師自身の考え方をもっと幅広くもっと柔軟にすることが必要だと感じた。

また、もう一つ反省点があった。それは、私が掲示物を用意しすぎたことであった。この授業の前半、子どもたちは意欲的に発言していた。ところが後半過ぎ。発言は引き続きたくさん出てきているものの何となく子どもたちの意欲が低下している空気を感じた。どうしてなのか、その場ではとにかく発言をさせ、課題に向かって授業を進めるしかなかった。そのことについて、授業を終えてから振り返ってみた。板書の掲示物と発問の仕方に問題があったことが分かった。(図5)

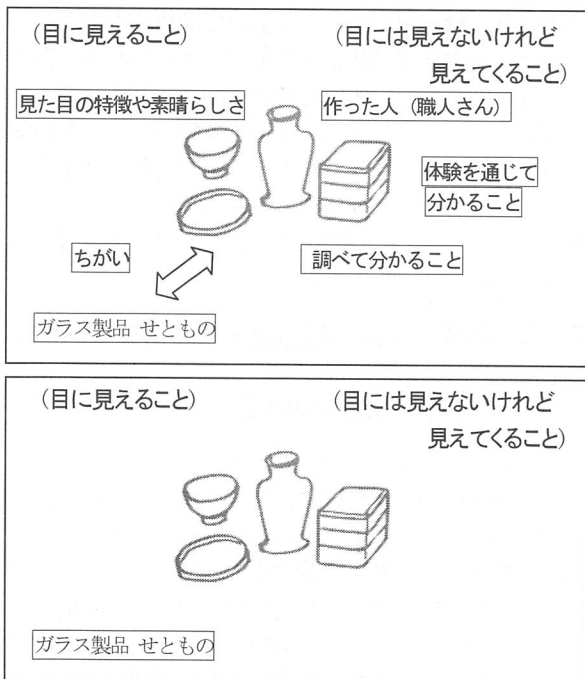


図5 今回の授業の板書(上)・改善後の板書(下)

細かい項目を黒板に貼り過ぎて、すでに設定されたような授業だったのである。子どもたちがたくさん意見を出しても、話し合い中の新たな発見にはならず、達成感や感動が取り去られたのである。それが授業を

単調な流れにさせ、意欲を損なう原因になったのである。

5.2 これからの取り組み

「学びの質の高まり」を意識して、まず教師自身の教え方の工夫やレベルアップを図りたい。

子どもたちの中には、「自分が考えを書いたり発言したりしなくても仲間の意見を聞いていれば学習できている。」と誤解している子もいる。前述のように、自分の考えを何らかの形で表現しないと「考える力」は伸びない。知識が増えただけになり、学習内容も表面的に理解できているに過ぎない。

‘何度も互いに意見を発言し合う’‘自分の考えを常に持つ’‘人の話を聞いて自分の考えと比べる’‘あらゆる方向からその内容を捉えていく’等のことをしっかり行った上で、本当に学習内容を理解できるのだ。きちんとした学習経過なしで本当の学習はあり得ないのである。だから、先ほど述べたことを子どもたちに意識させた全体学習にしていくようにしていきたい。

また、私はいつも、話し合いを深める子どもの発言を増やしたいと願っている。しかし、話し合いがスムーズに進んでいく場合と、何となく意見がかみ合わない場合がある。これは、話し合いのスタイルがまだ十分浸透していないことが原因である。そこで子どもたち同士の意見が上手くかみ合わない場面を振り返り、どんな点が悪いのかを分析し、次のような取り組みを考えてみた。「〇〇です。」や「〇〇だと思います。」の後に、「それは、□□となるからです。」「□□と思ったからです。」と理由や考えた経過等も述べる習慣をつけようと考えた。発言した子どもがどのように頭の中で考え、その答えや予想に行き着いたのかがよく分かるからである。また、そのような考え方が他の子にも伝われば、考える方法が全体に広まり、互いに考え方のレベルを高めることができる。新しい知識を共有することも大事であるが、考え方を共有する方が、話し合い活動自体がもっと進展していくはずである。この取り組みをしていくときには、「2文言うようにしましょう。」と子どもたちに呼びかけたい。「理由も言ってみよう。」と呼びかけても、どういことを話せばいいのか返って迷わせるかも知れないからだ。

このような教師の言葉かけのひと工夫で、子どもたちが仲間によく伝わる発言をし、仲間の考えを聞き、互いの意見をもっと共有することが出来る。そして、必ず子どもたちの学びの質が高まっていくはずである。

参考文献

- (1) 山邊文洋 著 「話し合いになる課題づくり5つのステップ」
- (2) 山邊文洋 著 「子どもが社会科で問題意識をもつ10のポイント」
- (3) 阿部出版「うるしの器」